

史話

因尾物語へその一

土民穴圍に籠る事

——主として大友興廢記による——

誤注 羽 柴 弘

薩州勢、豊後之地に討入るみぎり、因尾六人の武士、其の外組付の諸侍、皆佐伯太郎惟定の居城梅牟礼に籠城す。

在々所々の百姓等は、皆因尾に残り居て、一所に打寄り談合し、此所彼所の山にかくれ居るべきといひ、今一組の者も、一その儀もつともなり、梅牟礼の城にこもりては、薩州の大敵に取巻かれて、兵糧へびき、難し。当所の穴圍をこしらえこもりては、薩州勢如何にぞ寄せ来るとも、難なく運を聞くべし。」と、相談は相定まる。

此の岩穴は因尾井上と、う所にあり。麓に大川ありて、川辺より七所は峻難づづら折りの道なり。登りて行当る所は一面の岩壁、上に山重なりて高くそびえ、佳景備ありし所なり。

岩壁十餘間、その上に窓を明けたる如き岩穴あり。其の内はさながら石畳みにして平らかなり。百姓は心をあわせ、穴の口までつぎ橋や、綱を大木につけて伝い登り、岩穴より橋また綱を引きてれば、烏丸らでは翔り難き要害なり。

穴の口は板にて囲い、矢鏃をあげ、板の外は石をすり並べ、或いは竹の焼きときをそそえ、或いはつり

弓をこしらえ置き、薩州勢寄せ来らば、先ず綱を切り石を落とすべきたくらなり。この要害は、遠天にて弓・鉄砲を打ちかくべき様更になし。

さはありながら一つの難儀あり。その岩の滴水僅かにして、一人二人のうるおいの外、あたりにも水全くなし。されば大樽を集め水をたたえ、天水を伝うべきため、岩をうがち溝をつけ、兵糧米を運び、主菜を用意す。中には不手際なる大石に大とがり矢をかけ、「薩州勢をただ一天に」とののしる者もあり。

さる程に、天正十四年丙戌の十二月上旬、薩州の人數七、八百余人因尾表に亂入し、方々に火を放ち乱暴、山さがしのみぎり、一人の生捕りを案内として、この穴圍を破らんがため、先ず百余人圍の麓より寄せ来たる。兼て待ちもうけの石綱を、同時に二、三十切つて落とす。薩州勢を百余人微塵に碎き、岩穴の内より聞の声をあげしかば、山にひびき谷にこたえて一倍せり。薩州勢及女引き退きて、その後寄せ来たること更になし。誠は土民とば云いながら、無二の覚悟によつて難なく運を聞きぬ。

(中略)

さる程に、因尾の百姓、いま一組の者共は、佐伯梅牟礼の城もあぶなし。また当所穴圍にこもりては、何れもへ落ち行くべき様なし。後多も多き深山なれば、ここかしこに隠れ居て自由に歩きなごせは、薩州の野郎はさがし出さるることあるまじ。松の岩、又は岳王などいふ峻嶺の所にこもるべし。また左籠、右籠、といふ所は、後道にて、籠を左に片けなおして通る所なりといふ

て、松の岩・岳王・左籠、この三か所はこもりたる者共は、皆薩州方の者を探し出され、あるいは斬られ、あるいは生捕りとなる。

① 軍鎮まりて後、地頭が沙汰に、穴圃はこもりたる者、一城堅固に持ちたると同然なれば、給人に代を譲美す。また、左籠・松の岩ここかしこに隠れ、死を免がれたる者共は、か奴て逃げまうけりて隠病者なれば、皆所と扱われたり。(下略)

(注解)

① 史話 事實そのまゝの歴史というのでなく、歴史的な物語、穴圃 あながこい 本匠村大字井上にある石炭洞穴、因幡岳の中腹にある。

② 大友興隆記 豊後の太守大友氏四百年の興亡を書き記した物語で、寛永十二年佐伯氏旧臣杉本宗重によって書かれたもの。全三十二巻、この穴圃のことは巻十九に載っている。

③ 設法 原文は既述の通りで文語文だが、近世戦記物語としての独特の語句、文章表現がある。読者の理解を助けるために、文節と設け、句読と加え、平易な表現にした。(大體文でおりながら口語文の仮名づかいを用いたのはおかしいけれども)

④ 薩州勢 薩摩(鹿児島県内)の島津の軍勢、佐伯伯太郎惟定 佐伯氏十四代惟定 大友義統の麾下と云う佐伯

母牟礼城に拠っていた。

⑤ 母牟礼城 弥生新堀水の東正面にそびゆる母牟礼の山城、高十、

三四メートルの山頂には、古城址を偲ぶ石群がある。

⑥ 兵糧 戦時兵員の用いる食糧、概して一般人の用いる食糧をともなう。古語だが、今も用いられている。

⑦ つづら折 つづらの折曲れた形、ヘアピンカーブであるが、今の舗装された自動車道でなく、ジグザグとつづく山道。

⑧ 遠矢 弓(又は鉄砲)で遠くからほられておらう。

⑨ 玉葉 硝葉、あるいは煙硝ともいう。發砲のたまに用いる。

⑩ 天正十四年 紀元一五八六年 織田信長の後をうけて、秀吉が天下平定をすすめていた年である。

⑪ 松の岩 因尾のとこか、地名。

⑫ 岳王 ガクオウカクオウか不明、地名どこであろう。

⑬ 左籠 今江平の文字を用いているところか。籠は弓矢を竹製のかごにさし替るうていたもの。

⑭ 横道 かけはし、けわしい山道で崖に水を流してわたし、そのかけはしを渡る山道。

⑮ 切所 切立ってけわしいところ。難所。

⑯ 地頭 ここでは領主(母牟礼城佐伯惟定)

⑰ 給人 領主に仕える家来

⑱ 所を扱う 所払い。その居住地から他所へ追放される。

土民といひ、百姓どもと呼びます。今はいさゝか侮べつしたように聞こえるが、歴史的にはけつしてそうではない。国力の増おれると、兵力が盛んなるもといであつた。農民われ等、けつして卑下すべきでない。

因尾という音韻のひびきは決してわるくないのに、なぜか文化に隔絶された辺境のようなな、そんな先入観、そんな印象が、いまだにあるのではあるまいか。

とんでもない。因尾の農民は佐伯藩の悪政に抵抗して、大塚守自郷に逃散したり、文化九年の百姓一揆の発端ともなっている。その不屈の農民魂はどこから来たのであろうか。

それは豊かな山野と、中世に示した「因尾衆」のすさまじい力の結集、その歴史が、不屈の因尾魂がそうさせたのだ——と、そのように思つて見ている。